

## 試験経過記録 (その2)

(様式 4)

日向営林署

(2) クヌギ切断処理木成長量調査

クヌギ樹高成長促進を目的に、地上5cm、10cm、20cmの3通りの切断を昭和59年度に実行し、ぼう芽状況を調査した結果は表-2のとおりである。

表-2

切断箇所	ぼう芽 本数	切断工期	成長量								備考
			60年度	61年度	62年度	63年度	元年度	総成長量	平均成長量		
地上5cm	32本	9.8人	90	(32) 29	(22) 42	(23) 19	(22) 17	197 <del>100</del>	39 <del>30</del>	切断本数は各20本実行	
10cm	30	8.4	94	(30) 25	(23) 56	(25) 19	(20) 29	223 <del>104</del>	45 <del>30</del>		
20cm	37	7.0	104	(37) 25	(32) 51	(32) 24	(20) 46	250 <del>204</del>	50 <del>41</del>		

(注) ( ) の数字は、測定ぼう芽本数

(3) 被害木調査

ア. 各種被害調査表 (昭57~63) 表-3

樹種	調査本数	寒風害	虫害	兎の害	鼠の害	乾燥害	切害	鹿の害	猪の害	計	枯損率
ヒノキ1条	48			(7)		(1)				(8)	0%
ヒノキ2条	46	(2)	1	(4)		1		1		(6) 3	6
クヌギ1条	48		(2) 2	(2) 2			(2)		1	(6) 5	10
クヌギ2条	46	(7) 5	(1)	(1) 1			(5)			(14) 6	13

(注) ( ) は、被害を受けたが再生したもの。平成元年度新規被害は、鹿の害1本

イ. 表-3の被害木の中から再生したものを、昭和63年2月調査した樹高成長は、表-4のとおりで再生木は健全木に比しヒノキ87%、クヌギ67%の樹高成長を示している。

# 試験経過記録 (その3)

(様式 4)

日向営林署

表-4 健全木と再生木の樹高比較表

樹高	調査本数 (本)	健全木		再生木		計	
		本数	樹高	本数	樹高	本数	樹高
ヒノキ	94	78	279cm	14	242	92	270
クヌギ	92	62	179	19	120	81	167

※平成元年度は、健全木、再生木の成長差が少ないので調査省略

## 4. 更新及び保育の功程

作業種別の功程は、表-5とおおりである。

表-5

年度 作業種	57		58		59		60		61		62		63		元		備考
	作業法	功程	作業法	功程	作業法	功程	作業法	功程	作業法	功程	作業法	功程	作業法	功程	作業法	功程	
地拵	散布	13.6															
植付	普通植	21.2															
下刈	全刈	4.7	筋刈	6.6	筋刈	5.9	筋刈	5.6	筋刈	6.0	筋刈	6.1	筋刈	5.9	保育なし		

## 5. ヒノキのクヌギ混植区と単植区の成長比較 …… ほとんど成長差はない。

区分 \ 年度	元年度		備考
混植区	平均径級 5.2cm	平均樹高 366cm	
単植区	〃 5.1cm	〃 401cm	

# 状 況 写 真

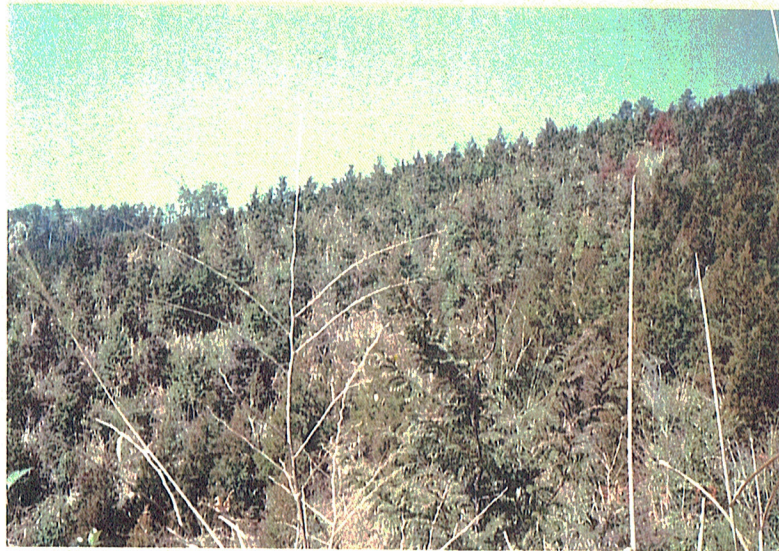
区 分	指 示
-----	-----

日 向

営 林 署

( 様 式 6 )

試 験 地 全 景 ( 尾 鈴 1 7 号 )



# 状 況 写 真

区 分 指 示

日 向 営 林 署

( 様 式 6 )

混植試験地の生育状況



# 状 況 写 真

区 分	指 示
-----	-----

日 向

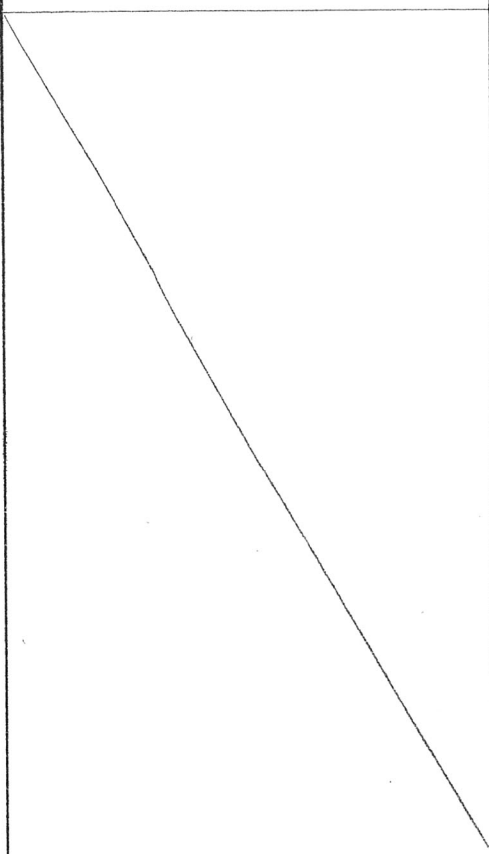
営 林 署

( 様 式 6 )

クヌギ切断試験木のぼう芽および生育状況



平成 2 年度 技術開発実施報告・計画

課題	クヌギ混交林施業法		継続・新規 継続	担 当	計 画 課	開 発 箇 所	日 向
目的	スギ（ヒノキ）とクヌギを混植、又はクヌギのぼう芽更新を行い、しいたけ原木生産と間伐等の組合せ、スギ（ヒノキ）人工林を槽置き場に活用することにより合理的なしいたけ生産技術と施業法を確立する。		指示・自主 指示				
年度別実施経過			2年度 実施報告	3年度 実施計画		備 考 (評価及び普及計画等)	
			<p>1. 調査事項                      (1) 成長量調査                      (2) 被害調査（野兎等）  <del>(3) 植生調査</del></p> <p>2. 保育方法の検討                      下刈省略</p> <p>事業費（技術開発） _____ 千円</p>	<p>1. 調査事項                      (1) 成長量調査                      (2) 植生調査                      (3) 林内照度調査</p> <p>2. 保育方法                      ヒノキ（クヌギ）の本数調整の要否及び時期の検討</p> <p>事業費（技術開発） _____ 千円</p>		<p>1. 評価</p> <p>ヒノキ、クヌギの成長差が拡大する状況にあり、当初（課題設定時）同量程度の成長を予測していたが、ヒノキの成長は順調であるもクヌギの成長が極端に悪く、クヌギの伐採時予測である15年生は不可能に思われる</p>	

# 試験経過記録（その1）

（様式 4）

日向営林署

課 題	クヌギ混交林施業法												
<p>1. スギ、ヒノキとクヌギの混植、または、クヌギのぼう芽更新を行い、椎茸原木生産と間伐等を組み合わせ合理的な椎茸生産技術と森林施業を確立する目的で、昭和56年度に2箇所の試験地を設定し、調査を実施してきたが、試験地の一つである三方界国有林138に林小班は、野鼠の害によりクヌギが全滅状態となったので、この試験地については昭和61年度で調査を打ち切り、尾鈴国有林17そ林小班についてのみ継続調査を実施しているので、その経過について報告する。</p> <p>2. 試験地</p> <p>（1） 場所 尾鈴国有林17そ林小班</p> <p>（2） 面積 2.25HA</p> <p>（3） 植付 昭和57年3月</p> <p>（4） 植付方法</p> <p style="padding-left: 20px;">ア. ヒノキ1条, クヌギ1条植（3プロット）</p> <p style="padding-left: 20px;">イ. ヒノキ2条, クヌギ2条植（3プロット）</p> <p>3. 成長量調査等</p> <p>（1）成長量調査は表-1のとおりで、平成2年12月の調査では61cm、クヌギ24cmの成長を示しており、植栽時に対してヒノキ約1.2倍、クヌギ約6倍の成長量を示しており、スギ、クヌギの成長差が拡大傾向にある。</p>													
<p>表-1</p> <p>（注）63年度以降調査は、再生木の調査数値を含む。</p>													
樹 種	区 分	単 位	s56植栽時	s57	s58	s59	s60	s61	s62	s63	H1	H2	成長量
ヒノキ	本 数	本	94	79	79	78	78	78	78	92	92	92	
	平 均 径 級	c m										6.2	
	平 均 樹 高	c m	37	66	102	144	190	239	279	325	366	427	390
	年平均成長量	c m		29	36	42	46	49	40	46	41	61	43
クヌギ	本 数	本	38	57	73	97	123	149	179	192	222	184	
	平 均 径 級	c m										2.3	
	平 均 樹 高	c m	38	57	73	97	123	149	179	192	222	246	208
	年平均成長量	c m		19	16	24	26	26	30	13	30	24	23